

## 【研究ノート】

# エスター・デイヴィッド『*Book of Esther*』と インドのベネ・イスラエル

小磯 千尋

## はじめに

ベネ・イスラエル (Bene Israel) とは、インドに暮らす3つの主要ユダヤ・コミュニティ<sup>1)</sup>の1つの名称であり、「ユダヤの息子たち」を意味する。インドの西海岸コンカン (konkan) 地方からムンバイ (Mumbai)、アフマダーバード (Ahmadābād)、プネー (Pune) などに居住する人々である。伝説によれば、2100 年以上前にイエメンから船で逃れてきたが、船が難破して7組のカップルがコンカンのナウガーオン (Navgaon) に漂着したという<sup>2)</sup>。彼らの出自は神秘のベールに包まれているが、一説には紀元前 721 年にアッシリアに滅ぼされて歴史から姿を消した「イスラエルの失われた 10 の部族」の末裔と言われている<sup>3)</sup>。インドの農村社会にシャンヴァール (シャニヴァール)・テリー Śanvār (Śanivār)・telī (土曜日の油搾り職人)<sup>4)</sup>のカースト名で組み込まれてきた。ベネ・イスラエルのコミュニティではユダヤ教の宗教儀礼や独特の婚姻制度を守り続けてきたが、言語は地域のマラーティー語やグジャラーティー語を話し、食文化はユダヤ教の「コーシャー / コーシェル (Koshā/ Kosher)<sup>5)</sup>」を守りながらも、インドの食文化を柔軟に取り入れている。衣服もインドの衣装を身に着けているため、外見的には区別が難しい。1948 年のイスラエル建国前は 67000 人のベネ・イスラエル人口

が記録されているが、イスラエルの建国後、特に1960年代以降イスラエルに入植する人々が増え、現在では5000人ほどがインドに残るのみとなっている（Weil 2002: 12）。彼らが居住していたコンカン地方や、ムンバイなどには壮麗なシナゴグ（Synagogue）や小規模な礼拝堂が今も残り、彼らの信仰の篤さを物語っている。

ここでは、ベネ・イスラエル出身の作家エスター・デイヴィッド（Esther David）の半自伝的な小説『*Book of Esther*』の前半2章に依拠しながら、彼らの慣習、ベネ・イスラエルのインド社会におけるマイノリティとしての位置、彼らのアイデンティティの拠り所について概観する。今回の研究ノートでは1940年ころまでに限定した内容になっている。後半は次回に続ける予定である。

## 1. 作者と作品

### 1-1 エスター・デイヴィッドについて

エスターはパローダーの美術大学を卒業後、彫刻家としての活動と美術批評家として新聞や雑誌で執筆活動を行い、美術教師として教鞭もとった。その傍ら、自らの属するコミュニティ、ベネ・イスラエルに関する小説を英語で発表し始める。2002年に本稿で紹介する『*Book of Esther*』と『*Walled City*』、2005年に『*Shalom India Housing Society*』を発表し、2010年に『*Book of Rachel*』でインドの文学協会の賞（Sahitya Academy Award）を受賞する。『*Book of Rachel*』では、コンカンの村に住む一人暮らしのベネ・イスラエルの女性レイチェルが家の裏にあるユダヤ教の会堂シナゴグを管理しながら、日々の生活を大切にしながら暮らす様子が料理のエピソードとともに語られる。イスラエルでの生活を選んだ娘と息子たちとのやり取り、シナゴグを売り払おうとするシナゴグの管理委員会のメンバーの動きを阻止する活動が話の中心になっているが、近隣のヒンドゥー教徒との関わりや日常生活の描写も大変興味深い。

## 1-2 『Book of Esther』

本書の構成は、1章：Bathsheba、2章：David、3章：Joshua、4章：Estherと各章の中心的主人公の名前で章立てがなされている。語り手かつ主人公であるエスターから見て5代前の祖母 Bathsheba から一家の一代記が語られ始める。2章の David はエスターの祖父、3章の Joshua はエスターの父である。400 頁近い大作であるが、そのストーリー・テラーとしての語りのうまさ、個性豊かな面々の活躍や葛藤が描かれ、一気に読ませる力がある。英語自体は非常にシンプルであるが、行間に読者の想像をかきたてる何かがあり、先へ先へと読み進めたいくなる。

続いて、『Book of Esther』の前半2章のあらすじについて見ていく。

## 2. あらすじ

### 2-1 第1章：バトシェバ

18世紀後半、コンカン地方の海辺の村（ダンダ Danda）に暮らすダンデカル（Dandekar）一族の長男の嫁バトシェバは、セポイ（sepoys）（東インド会社の傭兵）として従軍している夫の消息も分からないまま、悶々と日々を過ごしていた。義父のアブラハム（Abraham）は大きな農園でコメ、果物やココナツ、ビンロウの実を育て、ゴマから油を搾る家内工業もおこなっていた。大家族で暮らす彼女は、農園の仕事に興味を持たない夫の2人の弟に代わって義父の仕事を手伝いたいと思っていたが、当時のベネ・イスラエルのコミュニティでは、女性が台所以外の仕事をすることはご法度であった。意を決して、「農園の仕事を手伝いたい」と義父に伝え許可を得た彼女は、近隣のベネ・イスラエルの女性たちを家に招いてもてなし、農園で働くことの許可を得る。農園の仕事を管理するヒンドゥー教徒のソームバウ（Sombhau）の助けを得ながら、水を得た魚のように仕事に熱中するバトシェバは、ある日コブラを踏んで、危うく噛まれそうになるが難を逃れる。その夜彼女は高熱にうなされる。

その頃、ソームバウはアブラハムに村の守護神であるナーガデーヴ (Nāgadev) (蛇の神) に消息の知れないバトシェバの夫ソロモンの無事を祈る願掛けをしたいと願いでる。それを聞いていたバトシェバは心が動かされる。それからしばらく、夫を心配するあまり心が不安定になっていたバトシェバは蛇の幻覚に悩まされ、外仕事もできずにいた。そんな中、ソームバウの妻プラミラ (Pramila) が訪れ、バトシェバの状態を心配して村のナーガデーヴに願掛けをしたことを伝える。病氣平癒したおりに、お礼参りをするを約束させられたバドシェバは、元気になってからヒンドゥー教の寺院を訪れココナツを奉納する。そして、その年は例年になくコメが豊作となった。

そんな中、消息の知れなかったバトシェバの夫ソロモンが無事に帰還する。ソロモンはティプ・スルターン (Tip Sultān) の捕虜となっていたが、ユダヤ教の信徒ということでティプ・スルターンの母親の計らいで死を免れたという。バドシェバは夫ともにナーガデーヴへのお礼参りと、ベネ・イスラエルの祖先の墓参りを含む巡礼に出かける。

死から奇跡的に帰還したソロモンであったが、農園の仕事には身が入らず、再び傭兵として連隊に加わるべく家を後にする。ボンベイに向かう途中の海辺でユダヤ教の預言者に見える神秘体験をしたことから、除隊して家に戻ることを決意する。

農園の仕事に精を出す妻バトシェバを後目に、中庭でのんびり昼寝をするソロモンにイライラする父アブラハム。そんな中、バドシェバと弟メナシェ (Menashe) の妻シュルミス (Shulmith) の妊娠がわかる。ソロモンは農園の会計を手伝ったり、家畜の世話をしたり、簡単な大工仕事に精を出すようになる。

娘を望んでいたバトシェバに娘タマラ (Tamara) が生まれて10年ほど経った頃、村が干ばつに見舞われる。そこへ、イナゴの大群が押し寄せ作物は甚大な被害を被る。農園に被害を見に出かけたバトシェバは干上がった池の底に瀕死のコブラを見て、再び高熱にうなされる。夢うつつの中で、巨

大なコブラが現れ、彼女は恐怖で気絶してしまう。そんな中、再び妊娠が分かった彼女は、コブラの子を宿したに違いないと思い込んでしまう。

娘タマラについたしつこい虱に苦慮していた折に、ソロモンのすぐ下の弟メナシェが調合した薬草入りのヘア油が虱に劇的に効き、人々の間でも評判となった。バトシェバは夫ソロモンに相談することなく、その油を瓶に詰めて販売し、広告を出すことを提案する。それを知ったソロモンが反対すると、バトシェバが抗議し、ソロモンは妻に手を上げてしまう。それからバトシェバはソロモンと一切口をきかずに日を過ごす。許しを請う夫に対して、「私がこなしてきた一切の仕事を代わってやってみせてくれたら、私は喜んで台所に引っ込む」と告げる。今まで家族のためにコミュニティのやり方に逆らってまで頑張ってきたことに対する夫の仕打ちに打ちのめされたバトシェバは、妊娠中の不調と相まって抑うつ状態になってしまう。

雨はいっこうに降る気配を見せず、人々は閉塞感に苛まされる。村の2歳児がオオカミに襲われるなど不穏な事件が続き、村人たちは魔術師に原因究明を依頼する。魔術師は妊娠中のバトシェバの邪視が自然災害の源であると告げる。ベネ・イスラエルコミュニティの占星術師がみんなを集めて祈りの会を催し、コーチンのユダヤ教徒から学んだ<sup>6)</sup>という雨を願う祈りを捧げる。それはマラーティー語のバジャン (*bhajan*) (神への賛歌) をユダヤ風のアレンジしたものだった。集まった全員で唱和すると不思議な一体感に満たされた。

その夜バトシェバは大量に出血し、流産してしまう。瀕死の状態になりながらも、誰にも助けを求めずにじっと耐えていたが、ソロモンが気づき、家族全員で手当てを施し一命をとりとめる。子供を流産してどこかほっとしているバトシェバであった。

雨は依然として降る気配さえ見せなかったが、村人たちは流産したバトシェバは子供を「供儀に付す」という十分な代価を払ったので、責められるべきではないと結論づけた。体調が戻らないバトシェバの代わりに、ソロモンの末の弟エノックが農園仕事を手伝ったが、アブラハムは一部農地を売っ

て、残りは息子たちに分け与えたえる決心をする。ソロモンはかつて所属していたイギリスの第6連隊に願い出て、ボンベイで2年間医学の勉強をしてアシスタントの資格を得る。当時のダンデーカル家の経済事情から、ソロモンは東インド会社の医療アシスタントとして働く必要があった。動物好きのソロモンは犬の繁殖も手掛けた。

アブラハムの死後ダンデーカル農園はわずかに果樹園と菜園を残すのみとなり、油搾りと東インド会社を辞めて村で診療所を開いたソロモンの稼ぎで家計を賄っていた。アブラハムの妻エリシェバは寝たきりとなり、バトシェバとエノック（Enock）の妻ヤコベス（Yakobeth）が介護していた。

アブラハムの死から数年後、次男のメナシェがアフマダーバードに移り住む。アフマダーバードのデリー門近くのムスリム居住区にダングの家に似た家を借りて新しい生活を始めた。後にソロモンたちもそこに合流する。

ここから、ダンデーカル一族の舞台はグジャラート州のアフマダーバードに移る。

## 2-2 第2章：デイヴィッド

第2章はバドシェバのひ孫で、エスターの祖父にあたるデイヴィッドが主人公であるが、前半はデイヴィッドの父ジョセフ（Joseph）について語られる。年代についての言及はないが、ジョセフの誕生は1820年頃と推測される。ジョセフは両親を早くに亡くし、祖父母ソロモンとバドシェバに育てられる。彼はムンバイにあるアメリカのミッション・スクールで学ぶ。同時に森や森の生き物たちに興味をもち、トレッキングに出かけ、自然と親しみ、森の生き物たちと心を通わせていた。また、ソロモンから伝統的ユダヤ教の祈りの章句を暗記させられた。このころ、家族内で用いられていた言語はコンクニー（Konknī）語<sup>7)</sup> 訛りのマラーティー語であった。英語教育を受けた若い世代は英語も用いるようになる。ジョセフは英語とヘブライ語も学び、ヘブライ語で祈りを先導できるようになった。

ジョセフは幼い時から一緒に暮らした大叔父エノック（ソロモンの末弟）

の娘スィンハ（Simha）との結婚を強く望んでいた。ジョセフがムンバイで勉強している間、彼女は伯父ソロモンの弟子となって、鳥や動物たちの世話をし、もう一人の伯父メナシェからは絵を学んだ。当時のベネ・イスラエルの女性たちは、刺繍やキルト作りを学ぶのが常であったが、彼女は絵を学び、常にスケッチブックを身近に置いて、鳥や植物を描き続けた。そんな中、彼女は一羽の傷ついたクジャクと心を通わせる。ケイヤと名付けられたクジャクは彼女の生涯の友となる。医師となったジョセフと結婚してプネーに暮らす時も、ケイヤを連れて行くことになる。この地で彼女は11人の子供を産み育てる。スィンハは勉強熱心で、子供たちから歴史や地理も学んだが、英語だけは理解していても話そうとはしなかった。彼女はヘブライ語の祈りも学び、それを子供たちにしっかり伝授した。

そんな中、ジョセフは昔からの趣味である、森への冒険に出かけていた。一度出かけると時には1週間も音信不通のことがあった。森に暮らす先住民と交流が始まる。サソリに噛まれた子供を治療したことをきっかけに、先住民の首長ラゴージー（Ragoji）と親しくなる。ジョセフはラゴージーから天文学や占星術、薬草学を学ぶ。一緒に森に棲む野生のヒョウ、トラ、オオカミ、鹿などを観察するなど貴重な時間をともに過ごす。そんな中、彼は一人で森の奥深くまで入って、稲光のような光を目にする。ラゴージーにその体験を話すと、彼は「あなたは宇宙の聖なる神に祝福されている。明日また同じ場所に戻りなさい」と言った。恐怖に囚われ、その助言に従わずにプネーに戻ったジョセフはスィンハにその出来事を話すと、彼女はその光と対面するように勧め、危険を感じたらユダヤの祈りを唱えるように忠告した。数日後、ジョセフが不思議な光と出会った地点に戻ってみると、そこには7つの頭に赤いルビーを埋め込んだ巨大な白いキングコブラが鎌首を持ち上げて立っていた。コブラはジョセフの魂の内奥まで届くような目で見つめた。瞬きもできずに見つめていたが、彼は目を閉じて、手を合わせてユダヤ教の祈りの言葉を唱えると、その光は消えていた。その後、ラゴージーの小屋にたどり着くと、ジョセフは12時間眠り続けた。目覚めたジョセフから

詳細を聞いたラゴジーはジョセフの足元にひれ伏した。ラゴジーによると、ジョセフが見えたのは森に棲む彼らの守護神であるシェーシャ・ナーガ (Śeśanāga)<sup>8)</sup> であるという。ジョセフの神秘体験は一族の重要なエピソードとして代々語り継がれることとなる。

祖父ソロモンの死後、ジョセフはアフマダーバードへの転勤を願い出る。ジョセフはダンデーカル一族の名実ともに長となり、人々からは Dr. イサブジー・ダーダー (Isabji Dādā) と呼ばれ尊敬された。彼の調合する薬は非常によく効くと評判で、昼間は駐留英国軍の病院で働き、夕方からは家で診療を行った。

息子のデイヴィッドは医学生のとくに 13 歳のシェバベス (エスターの祖母) と結婚する。稼業ともいえる医者となった息子デイヴィッドがブネーに赴任することになり、イサブジーは非常に喜んだ。彼らがかつて住んだ家に再び息子夫婦が暮らすことになったからだ。デイヴィッドはブネーでエロワラ (Yervada) 刑務所に勤務する。

ダンデーカル一族のお気に入りの物語の一つに、1898 年にデイヴィッドがインドの民族主義運動の推進者である B.G. ティラク (Bal Gangadhar Tilak) と出会ったエピソードがある。当時ティラクはエロワラ刑務所に投獄されており、イギリス政府は彼に 1 枚の紙も提供することを禁止していた。デイヴィッドはティラクのために医薬品に忍ばせて紙を提供した。その紙の下には、ティラクの好物である嗜好品であるビンロウの実をカットしたものも忘れずに忍ばせた。そのような日々を過ごすうちに、デイヴィッドの行動が政府に知れるところとなり、彼は罰としてブネーから田舎に転勤となる。ティラクはビンロウの実のお礼にとシェバベスに自分の小指にはめていた指輪を贈る。真珠が埋め込まれた細い金の指輪で、以後一族の家宝となる。新たな任地に向かう途中でデイヴィッドはアフマダーバードに立ち寄り、伝染病に罹った弟サミュエル (Samuel) を見舞うが、それが最期の別れとなる。このころからダンデーカル一族は、ダンデーカルの姓の使用をやめ、祖父デイヴィッドの名前を姓として用いるようになる。



ティラクとの関わりから、デイヴィッドは徐々にインドの政治活動との関わりを深めていく。デイヴィッドはイギリス政府の医務官として働くことを辞め、父イサブジーの診療所を手伝い、夕方には自宅の診療所で無料の診察を行った。この頃から、デイヴィッドはインド人としての自覚を深め、独立闘争に身を投じるようになる。

イサブジーの末の息子ソロモン2世は、亡くなった妻を偲ぶよすがとして飼い始めたペットのオウムを巡って、大家族の中で孤立していく。オウムがおもちゃを誤飲したことをきっかけに、ついに彼は息子たちの家族とともに、デリー門の家を出てゆく事態となる。ここから一族の分裂が始まる。

デイヴィッドも動物好きで、家には様々な種類の動物がペットとして飼われていた。また、ティラクの後継者であるヴァッラバーイー・パテール (Vallabhbhai Patel) と交友を結んだデイヴィッドは独立闘争運動へとめり込んでいく。国民会議派に加わり、遅くまで家で集会を開き、活動家たちをもてなし、彼らとともに政治活動を続けた。1920年には市議会選挙に出て、紡績工場の所有者を破って当選を果たす。彼の政治活動と社会改革運動は、伝統的ユダヤ人コミュニティと相いれないことが多かった。自然にユダヤ人コミュニティと距離を置くようになっていった。しかし、デイヴィッドは彼の子供たちにユダヤ教徒としての教育を続け、子供たちにサバト (sabbath 安息日) のヘブライ語の祈りも習得させた。彼は教育擁護者としても知られ、長女ジェルシャ (Jerusha) と長男メナチェム (Menachem) には高等教育を受けさせた。ジェルシャは学業優秀で、コミュニティ初の数少ない女医の一人となった。

デリー門近くの家には、たくさんのペットが飼育され、いい香りのする木々が植えられていた。鹿、ニルガイ、犬もコッカスパニエール、テリアなどが飼われていた。特にシーザーと名付けられたテリアはデイヴィッドになつき、彼の気持ちを誰よりも理解していた。デイヴィッドは動物たちをきちんとコントロールする術を身に着けていた。

そんなある日、シーザーが熱を出す。獣医は蜷虫のせいだと診断し薬を処方

方したが、今まで家の外へ出たことがないシーザーが、デイヴィッドの命令にも従わずに、通りで丸まったまま家の中に入ろうとしなかった。ジョシュアはシーザーが狂犬病にかかっていると見抜いた。シーザーは大切な家族を不本意に傷つけないために、あえて家の外に身を置いていたのだ。ジョシュアの的確な判断により、獣医の注射によってシーザーは安楽死させられた。それまで、他の兄弟に比べて勉学に身の入らないジョシュアに辛くあたっていたデイヴィッドは、ジョシュアの的確な判断を認めて、彼に大切なペットたちの世話を任せる。

デイヴィッドとシェバベスは何人かの子供を幼くして亡くしている。ソフィー (Sophie) という名の瘦せて色白の女の子は幼くして病死している。エスターの父ジョシュアは幼少期に目の前で一歳違いの兄アルバート (Albert) を事故で亡くすという悲劇に見舞われた。アルバートは近所の子供たちとジョシュアと一緒にクリケットに興じていたとき、石灰を粉碎する機械に落ちたボールを拾おうとして粉碎機に巻き込まれて死んでしまう。5月23日のことだった。シェバベスは毎年、アルバートの命日には白い服に着替えて、カディッシュ (Kaddish)<sup>9)</sup> を唱え、非業の死を遂げたアルバートを生涯悼んだ。

教育熱心で厳格な父デイヴィッドはジョシュアを無益な存在としてきつく当たっていた。溺愛する母は、家族の伝説のエピソードである、イサブジーが見えたシェーシャ・ナーガのご利益がジョシュアにあると固く信じていた。ジョシュアは勉学に身が入らず、学業をやめ紡績工場で働く。そこで飼われていた当時としては珍しいダチョウに魅せられる。ダチョウに気を取られすぎたことが原因で仕事も解雇になってしまう。彼は唯一ずっと続いていたボディービルディングで活躍してグジャラート州で賞を取るなど、一族の中では稀有な個性を放っていた。見栄えもよく、映画スターにスカウトされかけたこともあった。これは厳しい父デイヴィッドの大反対に合って諦めざるをえなかった。動物好きで、狩猟の才能もあったジョシュアは藩王の狩猟のアレンジや随行、猟銃の整備などを器用にこなし、藩王に可愛がられてい

た。動物の剥製制作も独学で身につけた。ジョシュアは動物と交信する特殊な才能を有していたようである。母シェバベスが信じていたイサブジーが見えたシェーシャ・ナーガの力が及んでいたのかもしれない。

政治活動に取り組んでいたデイヴィッドは心臓麻痺で急死する。残されたシェバベスは多くの困難に直面する。政治活動の名目で家に集まる多くの人々をもてなすために、デイヴィッドは知り合いから多額の借金をしており、残された家族はその返済に苦勞する。当時一家の収入は産婦人科医となっていた長女ジェルシャバに頼るのみであり、彼女の収入で家族を養い、借金の返済も行なわざるをえなかった。

ジェルシェバはデイヴィッドが健在なときに、医学部の教授でバグダティ・ジュー出の妻を亡くした男性から求婚された。しかし、彼がベネ・イスラエルでない点と再婚者であるということで反対され、諦める。当時同じコミュニティからの求婚も何件かあったが、デイヴィッドは「娘にふさわしい相手ではないと」申し込み受け入れなかった。そんな中、デイヴィッドが急逝し、家族は彼女の結婚相手をみつける機会を逃し、彼女は生涯独身で通すことになる。ベネ・イスラエルとバグダティ・ジューの確執についてはエスターの小説の随所で言及されている。バグダティ・ジューのコミュニティは自らの優位性を疑わず、ベネ・イスラエルのユダヤ教徒としての正当性を疑い、見下していた (Esther 2002a:135) ことが窺える。ユダヤ教徒の共同墓地に関しても、バグダティ・ジュー側が一方的に壁を造ってベネ・イスラエルと分けたエピソードにデイヴィッドが憤慨する話 (Esther 2002a: 134) が出てくる。同じユダヤ教徒ではあるが、互に通婚関係はなく、むしろ近親憎悪に近い感情があった。

3章はエスターの父ジョシュアと母ナオミの結婚、エスターの幼少期が語られる。4章はエスターの婚約破棄やヒンドゥー教徒との結婚とその破綻と波乱に満ちた半生が描かれる。1948年のイスラエル建国に伴う、インドからイスラエルへの入植と、かの地での葛藤についても語られる。

### 3. 考察

あらすじを紹介したエスターの半自伝的な小説では、ベネ・イスラエルの代表的な生き方が語られている。この章では、小説の内容を裏付ける当時のコミュニティの置かれた状況を考察したい。

#### 3-1 コミュニティ、家族、婚姻

ベネ・イスラエルに関する17世紀以前の記録ははっきりしていないが、コンカン地方の村にすでにベネ・イスラエルの家族が暮らしていたことはわかっている (Isenberg 1995: 86) 彼らの苗字のつけかたは、出身の村の名前のあとに、接尾辞 *-kar* をつけて、「～村出身」を表す。調査によると135の *-kar* のつく姓が記録されている (Ibid. 91)。エスターの祖先のダンデーカルはダンダ村出身を意味した。エスターの一族同様、途中で旧約聖書などに依拠した苗字や名前に変更する人も増えた。

家族形態の基本は父方の兄弟と同居する大家族であった。エスターの話の中でよく語られたイトコ同士の結婚が一般的に行われていた。インドに居住する他のユダヤ・コミュニティ間との婚姻関係は結ばれなかった。婚姻は厳格にベネ・イスラエル内に限られていた。また、少数派コミュニティの宿命として、コミュニティ維持のために、家族を増やすことが暗黙の了解事項となっていたため、子だくさんの家庭が多い。

ユダヤ教徒としての信仰や食の規制も守り続けていたが、近隣のヒンドゥー教徒とは良好な関係を築いていた。18世紀後半から19世紀前半の記録において、ベネ・イスラエルの女性たちがヒンドゥー教の神格に願掛けを行ったり、邪気を払うために祈りを捧げていることが報告されている。このように、ベネ・イスラエルは近隣コミュニティの影響を受けながら共存していたことがわかる (Ibid. 1995: 90)。バドゥシェバが夫の生還を祈願し、その願いがかなえられたのち、村のナーガ寺院にお礼参りをしたエピソードも紹介した。ヒンドゥー教の影響を受けたというよりも、近隣住民との交流

から自然に生まれた慣習であったのだろう。ヒンドゥー教の影響を受けたバジャン（神への賛歌）もシナゴグで歌われていた。『Book of Rachel』において、レイチェルがマラーティー語で「神よ、神よ（*Bhagvān*）」と詠唱する場面がある（Esther 2006: 8）。また『Book of Esther』において、神にヒンディー語で「パルメーシュワル（*Parmeśvar*）」と呼びかけている（Ester 2002a: 21）。また、同書において、結婚式前の「ヘナの儀礼」への言及があるが、これも明らかに、ヒンドゥー教の影響である。

ダンデーカルー族は、コンカンからアフマダーバードに移住すると、ムスリム居住地に居を構えた。ベネ・イスラエルコミュニティはイスラーム教徒とも隣人として平和に共存した。同じ神教を信仰し、割礼の慣習や食の規制など共通する点が多く、ヒンドゥー教徒よりもイスラーム教徒に親近感を抱いていたと推察される。

ベネ・イスラエルのコミュニティに目を向けてみると、彼らの間には「ゴーラー（*golā* 肌が白い）」、「カーラー（*kālā* 肌が黒い）」の区別<sup>10)</sup>があった。諸説あるが、船が難破してコンカンに漂着した7組のカップルの末裔がゴーラー・ユダヤで、ベネ・イスラエル以外の女性との間に生まれた混血の末裔がカーラー・ユダヤと言われている（Strizower 1971: 27）。これをユダヤ教内カーストと捉えるかどうかは疑問であるが、ゴーラーとカーラーの婚姻は忌避されていたらしい。

ベネ・イスラエルはユダヤ教的な慣習を守ってはいたが、自らユダヤ教徒という意識はなく、コーチニー・ジューによってユダヤ教徒であると「発見された」といわれている。互いの優位性を競いあっていたバグダディヤコーチニー・ジューに比べ、トーラーを持たなかったベネ・イスラエルは正統なユダヤ教徒と認められず、コーチニー・ジューのガイダンスによって、ユダヤ教として再認識された（Israel 1984: 304）。ベネ・イスラエルのコミュニティは、ユダヤ教徒と認められてからは、積極的にヘブライ語の祈りを積極的に学び、トーラーを手に入れるために奔走した。

エスターの祖父デイヴィッドは非常に魅力的な人物として描かれている。

医務官としてイギリス政府に奉職しながら、ティラクとの関わりをきっかけに、次第にインドの独立闘争に身を投じていく。子弟の教育にも熱心で、自然や動物を愛した。デイヴィッドの生涯はインドに生きるマイノリティーの在り方を考えるうえでさまざまな示唆を与えてくれる。

### 3-2 仕事、教育

大多数のベネ・イスラエルはそのルーツをコンカン地方の農村にもつ。エスターの一族のように、コンカン地方での農場経営をしたのち、都市に移住していった。伝統的にはベネ・イスラエルの祖先たちは、インドに定住してからずっと油搾りを生業とし、「土曜日の油搾り人」と呼ばれていた。なぜなら、彼らは土曜日（安息日）には仕事をしなかったからだ（Strizower 1971: 22）また、ベネ・イスラエルのコミュニティのおよそ10パーセントが大工として生計を立てていた（Ibid. : 76）。ソロモンが除隊後に大工仕事を始めたエピソードと一致する。ボンベイに移住したベネ・イスラエルの人々はビルの建設現場や造船所で働いた。大工として働いた人々は、ボンベイで近代的な技術や道具を利用するようになった。村で行っていた油搾りの仕事に従事する人は皆無だった（Isenberg 1995: 88）。

また、マラーター王国にも兵として仕えていたベネ・イスラエルは、まず海兵隊員としてイギリス東インド会社の徴募に応じた。イギリスの東インド会社が商館をスーラト（Surat）からボンベイに移した1674年以降、多くのベネ・イスラエルの家族が仕事や教育の機会を求めてコンカンの村からボンベイに移住した。1750年の東インド会社の志願者名簿にはベネ・イスラエルの所属が「地元のユダヤ教徒」<sup>11)</sup>と記載されている（Ibid. : 87）。1755年に東インド会社がヴィクトリア城塞を奪取して軍隊の徴募を開始すると、陸軍に採用されるようになった。当初はボンベイの防衛が目的であったが、じょじょにマラーターやマイソールのティプ・スルターンなどへの攻撃にも転じていった。エスターの祖先であるソロモンが捕虜とされたのち解放された話は史実で、その時の連隊長ディヴェーカ（Divekar）が奇跡的な解放を

感謝して、1796年にボンベイ初のシナゴグ「Shaar'ha-Rahamin= 慈悲の門」を建設した（Ester 2002: 68）。

イギリス東インド会社に兵として採用されると、軍の駐屯地の宿舎に家族とともに移り住んだ。そこでは子女も基礎的な教育を受ける機会に恵まれた。軍隊ではベネ・イスラエルの兵士たちはその働きに応じて、昇進も約束されていた。実際、イギリス東インド会社の軍隊では、教育水準の高かったベネ・イスラエル出身者は将校まで昇進することができた。のちに規則が変更になり、実力主義から年功序列に代わり、以前のように軍隊内での昇進が容易でなくなると、軍隊におけるベネ・イスラエルの人数は激減する。魅力のなくなった軍隊に代わり、彼らは会計士、教育分野、医療分野などに転向していった（Israel 1984: 359）。

子女の教育にも熱心で、英語教育も他に先駆けて推進していたベネ・イスラエルコミュニティは進取の気性に富んでいたといえよう。少数の高い教育を受けた女性は医師として、教師として、小学校長、ソーシャルワーカー、看護師として収入を得ていたが、基本的には、「男性が外で働き、女性は主婦として家庭を守る」伝統があった（Strizower 1971: 77）。

ユダヤ教の祈りの言葉はヘブライ語が重視されたが、日々の生活では地元の言語（マラーティー語やグジャラーティー語）を使用していた。コンカン地方に暮らしていたときは、マラーティー語とコンクニー語を使い、アフマダーバードに移ってからはグジャラーティー語を家族間でも用いた。エスターの作品内にも会話文にヒンディー語やマラーティー語が普通に用いられている。英語で教育を受けた世代は、英語も流暢に話すことできた。

ベネ・イスラエルはコーチニー・ジューから正統ユダヤ教を伝授されてから、数十年の間に礼拝や祈りを熱心に実践し、ヘブライ語の学習にも取り組むようになった。同様にアメリカやスコットランドのキリスト教伝道団が1813年に旧約聖書のマラーティー語訳を提供すると熱心に学んだ（Israel 1983: 356）。のちに彼らは英語を通して、正統ユダヤ教の書籍を読むようになる。



これはすべてのベネ・イスラエルに普遍化はできないが、自然や動物に対する深い愛がエスターの一族に代々見てとれる。それが、エスターの父ジョシュアによって結実し、動物園の設立とつながる。

### 3-3 衣と食

コーチニー・ジューに比べてベネ・イスラエルは衣服、言語、日々の生活スタイルなどにおいてインド化していた。バグダディ・ジューは全くインド化しなかった (Israel 1984: 232)。

当時の家族写真では、男性はイギリス紳士のような恰好で正装するか、ムスリムやパールシー教徒のような服装をしていた。女の子たちはワンピースにリボンといういで立ちであった。年配の女性たちはマハーラーシュトラの伝統的な9ヤードのサーリー<sup>12)</sup>をまとうか、グジャラートのサーリーをパールシー式<sup>13)</sup>にまとっていた。唯一人の女性がグジャラートスタイルのブラウスとガーグラーと呼ばれるスカートに半サーリーをまとっていた。その後の写真では、女性たちは白いシフオンのサーリーを現代インドのスタイルでまとい、サーリーの端を左肩から垂らしていた。結婚式の写真を見ると、西洋の影響が強く、花嫁はサーリー姿にベールをつけ、手には手袋をはめバングル（腕輪）もつけている。そして、足には足輪をつけ、高いヒールの靴をはいており、どこかぎこちない雰囲気である（エスター 2002a: 120-121）。とあるように、インド風の服装を取り入れながら、西洋的要素も取り入れた独自のハイブリッドな雰囲気を醸し出していた。これは、当時のベネ・イスラエルの写真を見るとよく分かる。

食において、厳格な規制があるユダヤ教徒であるが、近隣に暮らすムスリムの食生活に近い食生活を送っていたようだ。コーシャー肉が手に入らないときは、ムスリムの「ハラール」肉で代用した (Esther 2007: 38) とある。エスター別の著作『*Book of Rachel*』と『*Bene Appetite*』によると、ユダヤ教の伝統的な食規制コーシャーを守りながらも、コンカン地方の食文化の影響を受けたレシピが詳細に記述されている。



### 3-4 宗教実践

ここでは、インドでのユダヤ教徒としての宗教実践について触れる。

現在では、ムンバイー、アフマダーバード、コンカン地方の村に大小さまざまなシナゴークや礼拝所があるが、18世紀にボンベイにシナゴークができるまでは、ベネ・イスラエルのシナゴークは建立されておらず、小さな礼拝所で集まって礼拝を行っていた。コンカンの村では、近隣のヒンドゥー教徒の影響を受けたキールタン (*kīrtan*) (説教と神への賛歌) が行われ、マラーティー語のクリシュナ神やガネーシャ神の賛歌がヘブライ語に訳され、ユダヤ教の賛歌とし朗読されていた (Esther 2002a: 59)。

ヒンドゥー教の影響を受けた祈りの詠唱については先に述べたが、コーチニー・ジューによってもたらされたヘブライ語の祈りも行われていた。ベネ・イスラエルの家庭においては、ヘブライ語の習得が急務のことと捉えられ、エスターの一族でも祈りを先導するために子供たちにヘブライ語を習得させた。

ベネ・イスラエルコミュニティでは、救い主メシアの先駆けである預言者エリヤ (Elijah) (別名エリアフ・ハンナヴィ *Eliahu Hannavi*) が篤く信仰されてきた。エリヤはイスラエルのハイファからインドを経由して天に昇ったと信じられており、エリヤの乗った火の馬車がインド、マハーラーシュトラ州アリバーグ近郊カンダーラー村の岩に足跡を残したとして聖地となっている。ベネ・イスラエルコミュニティではすべての儀礼の始まりはエリヤへの祈りから始められる (Isenberg 1995: 90-91)。

シナゴークには巻物の形をした『トーラー』が1巻は備えられ、祀られ、手の届くところに置かれる必要がある。この書物には必ず付属物がついている。例えば、トーラーを覆うロープや装飾品、トーラーが納められる聖櫃や箱、トーラーを読むための聖書台、常夜灯などである。ベネ・イスラエルは悲願であったトーラーをコーチニー・ジューの計らいで手にいれるのは、ボンベイ初のシナゴークが建立された1797年から30年後の1826年のことであった (Isenberg 1995: 99)。トーラーをシナゴークに収めることで晴れてユ

ダヤ教としての正統性を主張することができるようになった。

ユダヤ教の教えとしてシナゴークで声を出して祈りを捧げるためには、成人男性が10人以上必要とされる。その最低定数のことをミニヤン(miniyan)といい、公式の礼拝が成立する条件となっている。最近のインドのベネ・イスラエルコミュニティではこの10人を揃えるのが厳しい状況となっている。シナゴークにはメノラー七枝の燭台やメノラーのモチーフが各所に描かれている。メノラーは第一神殿に描かれていたといわれ、ダビデの星とともに、ユダヤ教のシンボルとなっている。

ベネ・イスラエルの家の戸口の側柱にはメズハ＝メズザという真鍮や大理石製の細長い印がつけられる。メズザを取り付けることは、「そこに住むものが常に神の御意を思い出すために」を意味するトーラーによって定められた掟である。人々は家の中に入る際には軽く手を触れる。

## まとめ

本稿では、エスター・デヴィッドの半自伝的小説のあらすじにかなりの紙幅を割いたが、インドに暮らすマイノリティー・コミュニティの生きざまを知るために資料的価値が高いと確信する。インド社会のマイノリティーとして、植民地時代には傭兵としてイギリス軍に属していた彼らが、独立闘争を通じて「インド人」としての意識を高めていく過程については、より詳細な分析が必要である。後半のベネ・イスラエルのイスラエルへの入植と葛藤について触れたうえで、全体として彼らのアイデンティティについて考察する必要があるため、この稿では十分な考察ができていないことを断っておく。

イスラエルはユダヤ人の出自の多様性と国家統合との葛藤である。同じユダヤ人というだけの理由で、歴史と伝統を異にした世界中の諸集団がイスラエルという一つの国家に糾合したが、いざ共同生活を始めたときの文化的歴史的背景の隔たりは大きく、社会階層化や出身地別の差別も見られた（市川

2015: 125)。特にベネ・イスラエルは「インドのユダヤ教徒」と定義づけられ、その正統性が疑問視された経緯もあり、イスラエル入植後は困難に直面したという。ベネ・イスラエルのイスラエル入植後については次の稿に譲るが、イスラエル建国の中心となったのは東欧出身の社会主義的なユダヤ人であり、生活様式や生活水準の違いから、国内に階層化が生じた（市川 2015: 124）なか、「インドのユダヤ教徒」としての彼らのイスラエルでの位置づけを考察する必要がある。インド社会ではマイノリティーながら社会の周縁に置かれることなく、重要な役割を担ってきた彼らが、イスラエルに入植後に矛盾や葛藤に直面することは次稿でみてゆきたい。

## 注

- 1) インドの3つのユダヤ・コミュニティは、人口が一番多いベネ・イスラエル、ケーララー州コーチンに暮らすコーチニー・ジュー、コルカタやボンバイで主に通商に従事するバグダティ（バグダットの）・ジューが知られている。それ以外にもアードラ・プラデーシュ州のベネ・エフライム（Bene Ephraim）、ミゾラム、マニプルのユダヤ系インド人はマナセ族の子孫 Bnei Menasseh を自称するグループがいる（Weil 2002: 12）。1990 年代初頭から、イスラエルへの帰還をきっかけにその正統性をめぐる論争が起こった。
- 2) Kehimkar, H.S. *The History of Bene Israel of India* (1937) によると、ベネ・イスラエルは紀元前 175 年にソマリアから亡命し、船が難破してインドの西海岸に漂着したと結論づけているが、イスラエルは紀元 5, 6 世紀になんらかのトラブルを避けるために南アラビアカベルシャからインドに逃れてきた人々の末裔がベネ・イスラエルと推測している（Israel 1984: 340）。
- 3) ベネ・イスラエルが好んで語る彼らのルーツについては、「イスラエルの失われた 10 の部族」の末裔説がある。旧約聖書に記されたイスラエルの 12 部族のうち、行方が知られていない 10 部族を指す。ソロモン王の死後（紀元前 10 世紀）、ユダとベンジャミンの部族のみがユダ王国を築いたソロモン王の息子レハバムに忠誠を誓い、他の部族は歴史から姿を消す（Strizower 1971: 10-17）。
- 4) 船が難破してナウガーオンに漂着したベネ・イスラエルの 7 組のカップルは、地元のヒンドゥー教徒たちの助けで油搾りを生業として、部分的にヒンドゥーのジャーティに組み込まれた。漂着したベネ・イスラエルの先祖たちはシェマ（Shema）と呼ばれる基本的なユダヤ教の祈りと安息日を守っていた

ために、「土曜日の油搾り人」と呼ばれた (Strizower 1971: 22)。

- 5) トーラーの定めとラハビ (Rahabi) たちの法によれば、敬虔なユダヤ人は次のものを食べてはいけないことになっている。—ヒズメが分かれていない動物、反芻しない動物、例えば馬や豚などの肉はいけない。—食べてよい動物の臀部はいけない。—ヒレやウロコのない魚はいけない。—肉と乳を取るには、ある一定の時間を置かなければならない。などの規定がある。(スタインバーグ 2012: 210-211)
- 6) 1768 年のコーチンの商人エゼキエル・ラハビ (Ezekiel Rahabi) の資料によると、「コーチンからコンカン地方のベネ・イスラエルにユダヤ教の礼拝方法や祈りを教えるために数人が派遣された」とある。のちにベネ・イスラエルの 3 人の若者がコーチンにユダヤ教を学ぶために送られ、のちに彼らがカジ (kazi) の祖先となったと信じられている。そして、オランダ東インド会社で働いていたエゼキエル・ラハビの息子デイヴィッド・ラハビ (David Rahabi) がベネ・イスラエルにユダヤ教を伝授したとある。興味深いのは、ベネ・イスラエルの伝説によると、西暦 900 年にデイヴィッド・ラハビがコンカン地方を訪れて (一説にはエジプトから) コンカン地方にユダヤ教らしき信仰を守っている集団を「発見」し、彼らがうろこのない魚は食べない、安息日を守っていること、生後 8 日目に割礼を行うことなどから、ユダヤ教徒と確信し、彼らにユダヤ教の礼拝やヘブライ語の祈りを伝えた。ベネ・イスラエルコミュニティにとって正統ユダヤ教をもたらしした同名の人物が 800 年の差をもって語られている (Israel 1984: 284, 291)。真偽は明らかではないが、ベネ・イスラエルがユダヤ教徒として世界に認知されるきっかけを作ったのがコーチニー・ジューであることは確かなようである。
- 7) インド南西部ゴア州の公用語。およそ 250 万人の話者人口をもつ。
- 8) ナーガ (蛇) 族の王。1000 の頭をもち、世界創造の合間にヴィシュヌ神を上に乗せて眠らせる。世界を支えるものとも、また、7 つのパーターラ (地獄) を持ち上げるものともいわれる。その頭被 (コブラのかさ状の頸部) はマンドヴィーパ (宝の島) と呼ばれる (菅沼 1985: 165-166)。
- 9) カディッシュは遺族が亡くなった人を悼んで詠唱する祈り。
- 10) イエメン出身のユダヤ教徒がカーラーで純正なユダヤ人という説もある。ゴーラーはカーラーとの婚姻を好まない。ヒンドゥー教のカーストに類似した社会区分という見方もある。
- 11) インド社会ではユダヤ教徒全般を「Yahudi」と呼ぶことがあるが、ベネ・イスラエル自らはこの呼称を用いてこなかった。彼らにとって「Yahudi」とはバグダディ・ジューや他のアラビア語話者のユダヤ教徒で、19 世紀初頭にボンベイに定住した人々を指した (Isenberg 1995: 88)。「地元のユダヤ人」と一括りに呼ばれることは心外であったようだ。

- 12) マハーラーシュトラのノワーリーサーリー（9 ヤードのサーリー）は一般的なサーリーのようにベチコートは着用せず、男性の腰布のように股の間に布を通して着用する。男性もヒンドゥー的衣装を身に着けていた。
- 13) 通商を通じて富を蓄積したパールスィー（拝火教徒のコミュニティ）は、ヒンドゥー教徒に比べて女性への規範が緩やかであった。衣装においては、中国貿易からもたらされた絹糸で牡丹や鳥、蝶などをボーダーに刺繍したサーリー（garo, gara）が知られている。

## 参考文献

- 市川裕 (2009) 『ユダヤ教の歴史』 山川出版。
- (2015) 『図説ユダヤ教の歴史』 河出書房新社。
- M. スタインバーグ、山岡万里子、河合一充訳 (2012) 『ユダヤ教の基本』 ミルトス。
- 勝又悦子、勝又直也 (2016) 『生きるユダヤ教 -- カタチにならないものの強さ』 教文館。
- 菅沼晃 (1985) 『インド神話伝説事典』 東京堂出版。
- David, E. (2002a) *Book of Esther*, New Delhi: Viking Press.
- (2002b) *The walled City*. Syracuse University Press.
- “Sari-Sutra: Bene Israel Costumes.” In Weil, S. (ed.) (2004) *India's Jewish Heritage — Ritual, Art, & Life-Cycle*, Marg Publication, pp.91-99.
- (2006) *Book of Rachel*, Penguin Books.
- (2007) *Shalom India Housing Society*, New York: The Feminist Press.
- (2018) *Bombay Brides*, HarperCollins Publication.
- (2021) *Bene Appetite — The Cuisine of Indian Jews*, HarperCollins Publication.
- Isenberg, S.B. “The Bene Israel Villagers of Kolaba District: Generations, Culture Change, Changing Identities.” in Katz, N. ed. (1995) *Studies of Indian Jewish Identity*, Manohar.
- Israel, B.J. (1984) *The Bene Israel of India — Some Studies*, Orient Blackswan. (\* 電子書籍のため、ページ設定が書籍の場合と異なる)
- Judah, I. (2017) *Evolution of the Bene Israels and their Synagogues in the Konkan*, Vishwakarma Publication.
- Roland, J. G. “Indian-Jewish Identity of the Bene Israel during the British Raj.” In Katz, N. (ed.) (1995) *Studies of Indian Jewish Identity*, Manohar.
- ” The Contributions of the Jews of India.” In Weil, S. (ed.) (2004) *India's Jewish Heritage — Ritual, Art, & Life-Cycle*, Marg Publication, pp.111-121.
- Singh, M.C. (2014) *Being Indian, Being Israeli — Migration, Ethnicity and Gender in the Jewish Homeland*, Manohar.

Strizower, S. (1971) *The Children of Israel: The Bene Israel of Bombay*, Oxford University Press.

Weil, S. (ed.) (2004) *India's Jewish Heritage — Ritual, Art, & Life-Cycle*, Marg Publication.

Weil, S., “The Heritage and Legacy of the Jews of India.” In Weil, S. (ed.) (2004) *India's Jewish Heritage — Ritual, Art, & Life-Cycle*, Marg Publication, pp.9-21.

Weil, S., “Bene Israel Rites and Routines.” In Weil, S. (ed.) (2004) *India's Jewish Heritage — Ritual, Art, & Life-Cycle*, Marg Publication, pp.79-89.

●本稿は、JSPS 科学研究費・基盤研究 (C) 「近現代インドのユダヤ教徒のライフ・ヒストリーと「国民国家」」(課題番号 18K00988, 代表: 井坂理穂、2018 年度～)のもとで行われた研究の成果の一部である。本プロジェクトのその他の成果として、井坂理穂「植民地期インドのユダヤ・コミュニティとシオニズム」『ODYSSEUS 東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻紀要』第 26 号 (2022 年刊行予定) も参照のこと。